



地域に目を向けるきっかけはどんなときですか。子育てが始まったとき、介護が必要になったとき、ライフスタイルの変化に伴って、今まであまり意識を向けていなかった自分の暮らす地域と関わり始める人も多いのでは…。地域のニーズを掘りおこし、それを仕事として地域のために働き、地域で生きる。そんな生き方をしている、NPO法人ワーカーズコープ職員、小川さんに地域活動の現状と今後の可能性についてお話を伺いました。



## 小川 勇気さん

(特定非営利活動法人 ワーカーズコープ)

東京北部事業本部 板橋学童 所長)

1984年3月3日生

神奈川県相模原市出身

大学卒業後、イベント会社勤務を経て、ワーカーズコープが行っている、出資・労働・経営が三位一体となる「協同労働」という働き方に共感し、参画。地域の方々や仲間達と一緒に地域で働き、地域で生きることを通じて町おこし、仕事おこしをする。全国が明るく楽しく元気になるよう活動している。主に板橋区の子育て関連事業、あいキッズなどを担当している。

小川さんが働いているワーカーズコープの最大の特徴は「雇用されない働き方(協同労働)」にあります。ワーカーズコープでは協同出資のシステムを取っています。働くみんなが5万円の出資を一口としていて、出資が何口であろうと「二人一票の原則」が基本となり、みんなで見解を出しながら仕事をしています。「二人一票の原則」、このあたりに地域と共に生き、仕事をおこすヒントがあります。仕事おこしの始まりは、地域の方々の「こんなところはないか」という思いがスタート地点になることが多いです。地域のさまざまな会合に出席したり、既に立ち上がっている事業の利用者からの素朴な希望を耳にしたり、常に新しい事業のアンテナを高くしています。地域の人々が本当に望んでいるものは何だろう、企業が見落としてしまいうような声を拾いあげ、地域の人々の生活を少しでも豊かにする事業を展開したい、そんな思いが小川さんから伝わってきます。

小川さんの目指すものは地域に「総合福祉の拠点」をつくることです。ワーカーズコープの強みでもある、保育園や児童館での事業、そして高齢者向けのデイサービス。その間に存在する就労支援をつなげていきたいと考えています。障がい児の例だと小学校から18歳までは放課後等デイサービス(放課後等デイ)に行けるが、そのあとは行き先がありません。働くか家にいるかしかないことが多くの障がい者の現実となっています。その方たちの生活が豊かになる事業、就労支援に今後力を入れていきたいそうです。例えば、ひとつのマンションの中に1階は保育室、2階は就労支援、3階はデイサービスといった拠点です。そこで多くの人の一生をカバーしたいと考えています。

小川さんの理想が現実のものとなれば、安心した子育て、介護など、家族だけで支えることが難しくなった現代社会にとって、これほど心強い拠点は無いのではないのでしょうか。

ワーカーズコープが地域の人々と一緒に立ち上げた板橋区での放課後等デイ「もちの木」、今後、活動が期待される「ミツバチ事業」、エコ時代の可能性を秘める「廃食油回収事業」について、次ページ以降に詳しく紹介しています。